

氏 名 やの きみこ
矢野 貴美子

学 位 博士（芸術学）

学 位 記 番 号 博（芸）甲 第 38 号

学位授与年月日 平成 30 年 3 月 31 日

学位授与の要件 学位規程第 3 条第 3 項該当

論 文 題 目 名 古典いけばなの姿
—従来の論議において見過ごされてきた
諸点—

審 査 委 員 主査 曲子 明良

副査 倉澤 行洋

同 渡邊 哲意

1. 論文内容の要旨

論文内容は六つの論題に分けて論じられる。内容の要旨は以下の通りである。

第一章

いけばな用語の大半は、時代により、また用いる人により内容が変化するので、専門外の人には理解しにくい。したがって、概念の確認と説明が必要となる。そこで古典いけばなを定義すると、「古典いけばな」は二つの意味を含んでいる。

第一は「花伝書に書かれている古くからの決まりによるいけばな」である。

第二は「人間と自然とを対立するものとしてではなく本来一体のものとして認識する世界観を持っているいけばな」である。

第一の定義は古典とは何かの形式面に、第二の定義は古典いけばなの内容面に関わっている。

第二章

ここでは、古典いけばながいつどうやって成立したかの歴史を論じる。古典いけばなは、背景にある各時代の政治文化と深く関係しているので、古典いけばなの流れを、政治史の区分により追って、その流れの途中で問題となる諸点にふれる。

古典いけばなの成立時期について、通説では「東山殿の御時」とされているが、佐々木道誉についての考察を通じて、古典いけばなが南北朝期にかなりの水準に進んでいた可能性があるとは指摘しつつ、花道史の流れをたどる。

第三章

ここでは、古典いけばなの底流をなす思想について論じる。古典いけばなの、人と万物自然が根本的に一つであるという見方は、例えば仏教の「草木国土悉皆成仏」、老子・荘子の「おのづから」の思想、日本古来の「カミ」の思想、陰陽五行説にもある。古典いけばなは、これらを融合して理念にしている。

第四章

ここでは、古典いけばなの、人も草木も自然の一部であり平等であるという世界観における自然について考察を深めている。「自ずから」「しん」「水際」「虚実一如」といった概念の考察を通じて、その原理を論じる。

第五章

ここでは、和歌と古典いけばなの共通点を論ずる。いけばなは「無声の和歌

である」と江戸時代の人と言った。和歌も古典いけばなも折々に咲き出る花の風情に感じて、それを言葉や造形に表現する。実物をそのままかたちにするのはない。だから和歌もいけばなも、その姿は虚構の世界である。

第六章

ここでは、古典いけばなの成立と漢画の関係を論じる。古典いけばなの立花の造形は足利将軍周辺で唐物絵画を管理していた阿弥衆が山水画をヒントに構成した可能性がある。『義政公御成式目』『文阿弥花伝書』に、中国絵画の空間構成の「三遠法」を思わせる「遠近」という言葉があるからである。遠景を木で表し、上段から下段へ草花で道を「立て下し」近景を草花で表すのは、山の麓から山頂を見上げる遠近法に他ならない。そこで彼らが「たてばな」を創作する際、水墨山水画の構成法を取り入れた。彼らの「たてばな」は足利氏が滅んだのちは、池坊に引き継がれ、池坊の「たてばな」方式と合流した。

以上六章の内容を総括し、導かれた論点は、「古典いけばな」と「宋・元の水墨山水画」、更に「和歌」との関連性である。

また、古典いけばなの考え方は、日本人そして東洋人の自然観に基づいていることも明らかにされた。古来日本人は、自然と対立するのではなく、一体のものとして自然をとらえ、人と森羅万象・万物は根本的に一つであるという見方をとってきた。人も動物も草木も自然の一部であり全て平等であるという世界観である。

この思考はごく一部の例外があるにせよ、日本の美術・芸術全般に通じる基本的かつ普遍的な考えである。絵画や工芸、デザインなどの、美術として分類される領域、建築・庭園、華道・茶道、歌舞伎や狂言などの芸能、和歌や俳句を含む文学、音楽等々、全ての芸術と称される様々な分野で日本形式として論じられてきた。その根本的な思想は、人間は自然と一体であるというものであり、日本美とは無駄なものをそぎ取り簡略簡素でその奥にある真の美として追求される。それは全ての芸術の基本的な考え方である。

本研究は、そういった中であえてこのテーマに挑み、「古典いけばな」という切り口で百頁を超える論文において、様々な様式や分野に研究領域を広げ、深く掘り下げて研究を重ねてきたものである。その結果、「古典いけばな」は、自然と一体であると自覚した人々が、千変万化する草木を見つめて見出した自然美を生け表そうとしたものであると結論付けた。

2. 論文審査結果の要旨

「古典いけばな」の姿についてその定義、流れ、思想、哲理また、和歌との

共通点や盗用美術との共通点について順次論じ、特に日本人の自然観、世界観である「人と自然の森羅万象は一体のもの」であるという仏教的摂理や八百万の神々的な自然に対する畏敬の念を根底において「古典いけばな」を取り上げている。従来いけばなの世界観についての踏み込んだ研究がなかった中での本研究の成果は評価に値する。

また、特に宋・元時代の中国山水画と古典いけばなのとの関連を詳しく研究して独自の視点で論じている点も高く評価できる。

3. 最終審査結果

以上、本研究の独創性、文献を精査した研究努力、筋立てのはっきりした論理構成等を検討した結果、審査員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に達していると結論付けた。